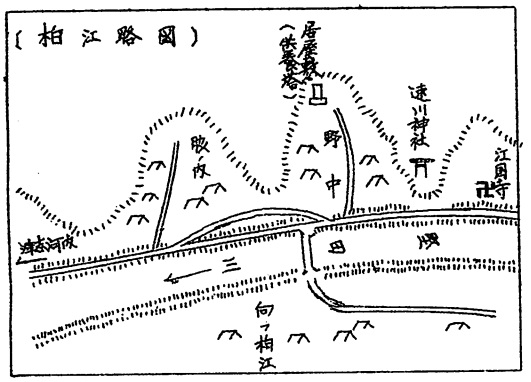
研究

供養塔と飢饉

会員 岩田善市

供養塔

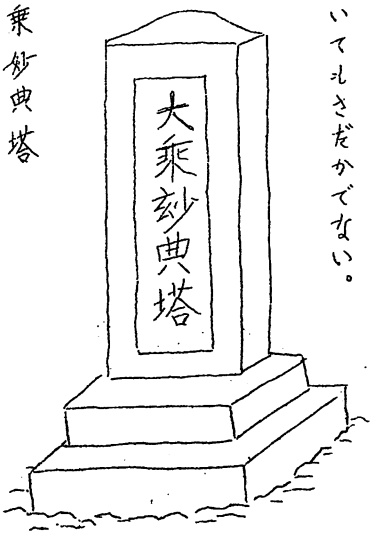
堅田柏江橋を渡って山手に向って行くこと二百メートル、依伯初代藩主高政の弟、森九郎左衛門の屋敷跡の、谷川を跡にして俗に〝居屋敷〟という所がある。谷を西にし、東は竹林で、墓地に古びた数個の墓が立ち、無縁仏となった石塔や地蔵塔が無雑作に置かれ、ものさびた竹林の中に立つ高さ一三五センチ、四〇センチ角の塔がある。



分ずらの卷くにまかせて、誰一人まつる者のないこの一個の塔には、昔を偲ぶ数々の悲しい飢饉の物語りが秘められている。享保十七年(一七三二)、全国的な大飢饉の供養塔である。

この屋敷はいたってせまく、昔はここに小さな庵寺があったと云いつたえている。江福寺(江国寺の前身か)という名まえが残っていることからみると、何時の時代か繁栄したものであろうが、古老にきいてもさだかでない。

(大乗妙典塔)



(正面) 大乗妙典塔

(左側) 享保壬子　公私大煌　秋稼不登　郡国凶荒
人々転餓　家々翳桑　窀穸横目　半百餘霜
清衆七十　屈請金剛　暮春連日　諷経焚香
蓐飯薦果　供茶供湯　或摘樒葉　書写経王
喜捨良材　新茅弟堂　伏所庶幾　各自廸康

(右側) 維時天明二壬寅三月二十八日
龍昇山報賢禅寺珠月山誌焉
金剛山江国禅寺範浩海建立

(研究)

享保壬子(みずのえね)　享保十七年、この歳が大飢饉であった。
公私大煌(だいこう)　公は藩、藩も私もいなごの大発生で、
秋稼不登(しゅうかふのらず)　秋になっても稼(粒付けた穀物)が登らず、
郡国凶荒　郡も国も凶作で荒れはてしまった。
人々転餓(てんがく)　人々は餓を転じ、住居を変えて立ち去り、
家々翳桑(えいそう)　家々では桑の木まで翳れになってしまった。
窀穸横目(ちゅうせき)　窀は埋棺すること、穸はつかあな。埋葬したつか穴が、目によこたわるように多くなった。
半百餘霜　半百は五十で五十年のこと、享保十七年から数えて五十年忌である。

清衆七十　清い心の人々、信心深い人々が七十人集まり、
屆請金剛　樓を風して金剛（金剛般若波羅密多経）の書写を請う、
暮春連日　そこで晩春の頃、毎日毎日、
調経焚香　（ふうきょう・ふんこう）仏前に香をたいて般若波羅密多経をよみ、
薦飯薦果　（せんぱん・せんか）お仏飯を供え、果物を供え、
供茶供湯　茶湯を仏前に供え、
或摘樒葉　（びつよう）或いは樒（しきみ）の葉をつんで仏前に供え、
書写経王　経王（経典中最も尊いもの）般若波羅密多経を書写してここに埋めた。
喜捨良材　良い材木を喜んで寄進して、
新造翻堂　（ひっすう）翻はあら、造はかんばしい。香んばしい草でふいたお堂を新築し、
代所庶幾　（しょき）庶幾（こいねがう）代してこいねがう所は、
各自迪康　（てきこう）迪は道の俗字、みちびく、康（やすし）、各自が安んずるようにみちびいて下さらんことを。

天明二年は、享保十七年から数えると、五十年目に当る五十念忌である。享保の大飢饉には、柏江村にも近村にも、親子・兄弟の餓死者が多数出たにちがいない。酸鼻をきわめた往時を思い、死者の冥福を祈り、そして天明の今なお飢饉になやまされるこの地獄の苦難を、御仏の力によって救われんことを祈る、人々の切実な心をこめて祀った塔である。

享保十七年の飢饉

西日本一帯は、蝗（いなご）の異常発生から、田畑の被害夥（おびただ）しく、未曾有の凶作となって大飢饉に見まわれ、多数の餓死者を出した。佐伯市史によると西日本では一万二千人の死者が出たということである。九州地方では、餓死者が村の半数に及ぶところもあった。

七月になると、伊予の松山で農民の袖乞いといって、米屋に乱入したのを始めとして、諸所でうちこわしが起こり、秋には出雲・伯耆・石見・備後・長門で百姓一揆が起こり、各地に伝播しはじめた。

幕府は対策として、直轄領の租税米を蔵出し、米貸与、施米、米の買占禁止、酒米の制限をし、米価の引下げ政策をはかったが、米価はいぜんとして二倍の高値となり、窮民が都市に流れ込んで混乱した。各地では強訴一揆が地り、世の中は不安の一途をたどった。翌十八年になると、江戸の米買占めの元凶、米穀商御用達高間伝兵衛宅の打こわしがあり、こうした不倫の業者に敵意をもつ群衆によって、他地方にも拡がって行った。佐伯藩に於ては米千八百石を大坂に買い、窮民を救った。

毎年増加していた江戸時代の人口も、享保飢饉によって、これ以後停滞したという。

天明の飢饉

天明年間は連年の凶作で飢饉がつづいた。天明元年（一七八一）には疫病が流行し不安の中にあった。佐伯地方では、夏に大洪水が起り、米七、八三二石を失い、さらに疫病が流行して、飢饉と共に苦難の年であった。

翌二年になると、秋田藩の米商宅打ちこわしを皮きりに、和泉の庄屋打こわしなど相つぎ、瀬戸内・九州等の大凶荒、佐伯地方は七月十七日及び八月二十日の洪水によって、米一〇、二八九石を失うという飢饉になった。

天明三年（一七八三）、この年はとくに全国的冷害、多雨のため、夏の初めから異常天候がつづいた。ために作物は実のらず飢饉は始まっていた。七月には追打ちをかけるように浅間山の大爆発が起った。関東から甲信越地方

一帯は、火山灰によって作物は全滅、死者二万余人を出している。さらに噴煙のため東北地方は大凶作で、八戸藩の如きは収穫皆無、餓死者は津軽で八万余、南部で六万、仙台領十数万、其の他を合算すれば数十万の死者にのぼるといわれ、人肉を食う悽惨な地獄図会が展開された。食物がなければうちこわし、百姓一揆が頻発、幕府は取締令を出したが、そんな事ではおさまらなかった。

この飢饉は例外なく佐伯地方をも襲った。凶作の中に大洪水まで加わって、米八、七九二石を失い、食うに食物のない窮状となった。天明六年には冷害と大洪水。天明七年は夏の干魃に五穀実らず、佐伯領内は大飢饉となった。今泉元甫は、米百石を献じて窮民を救うという美談も生まれた。一揆は全国で一〇〇件、米騒動は三十五都市で起る、餓死其の他で全国的に人口が減少したほどであった。

農民の食生活

この時代の農民の食生活は、非常に程度の低いものであった。資料が少ないが、手許にあるもので調査してみると、「文化十二歳　浅越村御仕置五人組帳」には、次のような条文がある。

「食物は雑穀を第一にいたし、尤幼少又は年寄候て稼成らざるものは、草木の実葉根其の外時々の物を取置き候て、夫食のたりにいたし、雑穀を貯え置き凶年の節飢に及ぼず百姓相続き候様に兼て心掛けはげむべき事。」

このように日常食は雑穀で、麦を食うのは上等の食生活であった。稲作では上田でも反一石二斗位の石盛であるところを見ると、大半は租税として藩に納めるので、凶作の歳は皆無の状態であった。

では雑穀は何を作っていたか、若干の資料で見よう。

天明四年「西野村銘細帳」

一畑方　大小麦・粟・稗・大豆・唐芋・里芋・大根・麻・木棉

寛政二年巳十月「大分郡高城村諸色覚書帳」

一畑作　大小麦・大豆・粟・重(そば)二作り申、黍・小豆・芋・蕎麦少々作申候。野菜ノ品ハ菜・大根・牛蒡・茄子・てんじくいも・ちさ・にんじん・ねぶか・ちゝと・白菜作申候

庶民の食生活の雑食を記録したものには他の資料がある。

大野郡「下ノ村志賀村明細帳」

此義ハ大麦・粟・稗・高黍・蕎麦・芋・木ノ実・葛根・いびら・柊ノ木ノ皮・にれの木の皮・志ろうの根・わらびの根・阿わせの根・粉ぬか・樫木の実・高菜・水菜・ちさ・大根・茄子・芋板・あざみ・つち菜・かうそ・りつき出・うこぎ・せりすれ花草・いんおん菜など合食仕候。

こうした最低生活をしているものが、いざ飢饉となると、どんな悲惨な生活をしなければならなかったか、餓死者が出るのも当然である。

大分県地方史藩政史特集(一)の「江戸末期における関手永大平村の農民生活」(神崎信博)によってみると、凶作の時の食料について、次の様である。

「嘉永三年(一八五〇)の不作の時、人命つなぎがたきため、かづね・つは・ところ・いびら・すびら・はくり・たぶかば・ねこささの芽・うしのしたい・馬のしたい・ふつ・はなぶつ・くさぎ・わらびの根・むぎぬか・こぬか・其の外品々をとり」

―生きてきたとある。

畑のものでは不足して、山野を探し歩いて、食用としたのであろうが、それが全村民によって採集されたとなると、近くの草木はたちまち食いつくされてしまったことであろう。

(佐伯市下堅田　柏江)